

日本ブックデザイン賞 ホール・オブ・フェイム ～ブックデザインの先人達

◎設立趣旨

日本ブックデザイン賞は、本のデザインに焦点を定めたコンペティションです。本におけるデザインの価値をあらためて社会に提案したいと考えます。

日本ブックデザイン賞は、本のデザインに関わる優れた先人や、現在活躍している創作者に対してホール・オブ・フェイム（名誉の殿堂）を設立しました。日本を中心としたブックデザインの歴史と芸術的価値を認識するために、現在、未来の羅針盤として位置づけます。

継続することによって、世界には類のない日本独自の文化としてのブックデザインを見い出し、その文化を社会に認識してほしいと切望しています。



1

橋口五葉 はしぐち ごよう (1881-1921)

鹿児島市生まれ。本名は清。雅号は、生家の広い庭には樹齢300年ほどの五葉松が生えていたことにちなむ。13歳から地元の絵師に狩野派の画法を学び、1899年に上京。日本画の橋本雅邦に入門するが、まもなく洋画に転じて東京美術学校へ進む。これは、親戚にあたる黒田清輝から洋画を勧められたからといわれている。在学中は油絵を修行するが、次第に、より物語的・装飾的な絵画へと傾倒し、古代神話へ心酔していく。1905年、東京美術学校を卒業するが、同年に夏目漱石の『吾輩ハ猫デアル』で初めての装丁を手がける。漱石との関係は、五葉の兄が熊本の高等学校時代在学中に漱石の教え子だったことから、兄を介して『ホトトギス』に五葉が描いた挿絵を描くようになったことにはじまる。その挿絵を漱石が気に入り、装丁を依頼したという。以後、泉鏡花や森鷗外、永井荷風らと組み、装丁の仕事を行うようになる。装丁をはじめに、雑誌の表紙や絵葉書、ポスターやパンフレットなど数々のデザインの仕事へと広がり、グラフィックデザイナーの先駆けとして、明治期の末から大正期にかけて活躍した。1911年には三越呉服店が主催した懸賞広告の公募で一等賞を獲得し、五葉の名が全国に広がった。しかし、洋画家としての評価は恵まれず、1914年頃から次第に浮世絵に傾倒し、錦絵の研究・復刻に取り組む。研究者として鈴木春信論や喜多川歌麿論を発表しつつ、その後、版元を通さない私家版として珠玉の作品を制作するも、生まれつき病弱だった五葉は、1921年、41歳の若さで没す。



2



3



4

- 1：生誕130年 橋口五葉展 発行＝千葉県立美術館／2011年発行 より
 夏目漱石著『吾輩は猫である』（復刻版）大倉書店・服部書店刊／1984年10月20日（第26刷）／
 発行＝財団法人日本近代文学館 刊行
 2：中編の扉 3：上編・中編・下編のブックジャケット 4：上編・中編・下編の表紙



竹久夢二 たけひさ ゆめじ (1884-1934)

1884年、岡山県に生まれる。大正浪漫を代表する画家。早稲田実業学校専攻科中退。1905年に社会主義新聞『直言』のコマ絵でデビュー。日本に上陸したばかりのアール・ヌーヴォー様式に影響を受けながら「夢二式美人」を確立。肉筆や版画などの作品のみならず、多くの詩作なども手がけた。詩『宵待草』は曲が付けられて大衆歌として人気を博し、全国的な愛唱曲となった。絵はがき、千代紙、便箋、封筒などのステーションナリー、書籍、雑誌、絵本、楽譜のデザインなど、庶民や大衆の視点で多様な日用品の図案を手がけ、自ら制作・販売した。1923年設立の「どんたく図案社」、モダン女性誌『婦人グラフ』、童話『春』や『凧』の装丁を手がける。1933年には、ドイツのヨハネス・イッテン画塾で日本画講習会を開催する。一時は中央画壇への憧れもあったが受け入れてもらえなかった。新しい美術のあり方を模索した、日本の近代グラフィック・デザインの草分けのひとりともいえる。

竹久夢二の装丁の特徴は、彼がデザインした雑貨（ファンシーグッズ）と共通点がある。権威的でなく、大衆的な可愛らしさが表現されている点である。現在もなお、多くの女性が支持している。普遍的な日本独自の情緒美がある。



1



2

1：長田幹彦著『改訂続金色夜叉』 春陽堂 1920年
 2：竹久夢二著『すながき』 時代社 1940年



1

小村雪岱 こむら せつたい (1887-1940)

明治・大正・昭和初期の巨匠小村雪岱は、川越生まれで東京美術学校に入学し、日本画家・下村観山教室で学んだ。当時、見事な装丁本の一つとして鏡花本が挙げられる。その装画・装丁は、 鏑木清方 (1878～1972)、 鱈崎英朋 (1880～1968)、 橋口五葉 (1881～1921)らが行っていた。1914年、泉鏡花の「日本橋」の装丁で評価を得、それ以後はほとんどが雪岱が手がけるようになり、装画・装丁家としての小村雪岱の誕生となった。雪岱の仕事はどれをとっても伝統絵画の研究・浮世絵の系譜をもとに繊細な美が表れていて、江戸情緒の濃い、まさに春信の影響から独自性が生まれた。さらに当時の生きたデザインの感覚が随所に見られ、様々な仕事に反映されている。装画・装丁のみならず、1918年に資生堂意匠部に入社し、雪岱スタイルを確立し、資生堂デザインの創世記を作り上げた。1933年に朝日新聞に掲載された邦枝完二著の「おせん」の挿絵で白と黒の美を生かし、挿絵界に新風をもたらした。



2



3

- 1：平賀町の自宅画室にて。昭和11年11月『令女界』編集部撮影
- 2：泉鏡花著『日本橋』（復刻版）千章館版／1974年9月1日（第5刷）／
発行＝財団法人日本近代文学館 刊行
- 3：小村雪岱著『小村雪岱画譜』／1962年11月1日（第2刷）／龍星閣
右頁：邦枝完二作「おせん」挿繪「行水をつかうおせん」／左頁：「三日月」